



杜甫の詩における飢餓表現

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学 公開日: 2011-03-26 キーワード: 作成者: 後藤, 秋正 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00005963

杜甫の詩における飢餓表現

北海道教育大学札幌校漢文学研究室

後藤 秋 正

杜甫の詩には飢餓に関する多くの記述が見られる。飢餓に関して詩に述べること、これは杜甫以前の詩人たちがほとんど言及しなかったことである。それではなぜ杜甫はあえて旧来の一線をこえて、しばしば自身と家族の飢餓に言及したのであろうか。また、杜甫の詩の飢餓表現にはいかなる特徴が見られるのであろうか。これらの点について考察を加えたものである。

はじめに

乾元二年（七五九）十一月、杜甫は家族を携えて秦州（甘肅省天水市）から成州同谷（甘肅省成県）に入った。同谷では「乾元中、寓居同谷県、作歌、七首（以下、「同谷歌」）（『杜詩詳注』巻八。以下『詳注』）と「万丈潭」（同）を書いており、この歌は、同谷における杜甫の困窮ぶりを知る上で貴重な作品になっている。「同谷歌」の冒頭の歌は次のように詠じられている。

有客有客字子美	客有り客有り字は子美
白頭乱髮垂過耳	白頭の乱髮 垂れて耳を過ぐ
歲拾橡栗隨狙公	歲どし橡栗を拾いて狙公に隨う
天寒日暮山谷裏	天は寒く日は暮る山谷の裏
中原無書婦不得	中原 書無くして婦り得ず
手脚凍皴皮肉死	手脚は凍皴し皮肉は死す
嗚呼一歌兮歌已哀	嗚呼 ^あ 一歌す歌は已に哀し
悲風為我從天來	悲風 我が為に天より来る

杜甫が同谷に滞在した期間は一箇月に満たない短期間ではあった。しかし、「同谷歌」の中で、杜甫が野猿の後をについて行き、どんぐりやくりを拾い集めて飢餓をしのいだと述べていることは、後の詩人たちに強い印象を与えている¹⁾。この句には誇張であるとする見方もあるのだが、同谷において杜甫の一家が危機的な窮乏状態にあったことは確かである。

それでは杜甫は、食に事欠く窮状に置かれた時、特に飢餓に瀕した情況をどのように表現しているのであろうか。以下、このことについて杜甫の生涯をたどりながら、特に「飢（饑）」「餓」と「餒」などの語を手がかりとして、その飢餓表現にはいかなる特徴が見られるかについて、考察を試みることにしたい。

一 華州時代まで

杜詩において最も早く「饑」を含む「饑鷹」の語が用いられるのは天寶七載（七四八）冬の作、「贈韋左丞丈濟」（『詳注』巻一。全二〇句）である。

- 15 歲寒仍顧遇 歲寒 仍^なお顧遇し
- 16 日暮且踟躕 日暮 且つ踟躕す
- 17 老驥思千里 老驥 千里を思ひ
- 18 饑鷹待一呼 饑鷹 一呼を待つ

「老驥」の二句は『詳注』が、「老驥は、己れの衰うるに況え、饑鷹は、己の窮するに況う。思うと曰い、待つと曰うは、上の踟躕を承け、韋能く感動・激発すれば、則ち己は荆榛・蕪草に淪まざるを言う。」と言っているように、長安で困窮した生活を送っていた杜甫が、韋済に対して救済を求めているのであって、「饑鷹」の語には、自身の境遇を述べるとともに、例えば傅玄「鷹賦」（『芸文類聚』卷九一）に、「雄姿 世に逸かに、逸気 横いままに生ず」と、その気品が讃えられる鷹に自身を喩えて才能を誇る気持ちもこめられていよう。なお、飢えた鷹は、以下の詩にも描かれている。これも先に見ておこう。

「送高三十五書記十五韻」（『詳注』卷二。全三二句）は天宝十一載（七五二）に書かれた。

5 饑鷹未飽肉 饑鷹 未だ肉に飽かず

6 側翅随人飛 翅を側て人に随つて飛ぶ

7 高生跨鞍馬 高生 鞍馬に跨る

8 有似幽并兒 幽・并の兒に似たる有り

第五・六句は、『魏志』卷七、呂布伝に見える曹操の発言を踏まえて、高適が河西節度使哥舒翰につき従って彼の幕府に赴くことを述べており、飢えた鷹は、有能でありながら満足できる官職に就いていない高適に喩える。また、五律「觀安西兵過赴閩中待命二首」（其一）（『詳注』卷六）は乾元元年（七五八）秋、華州にあった時に書かれた。

5 老馬夜知道 老馬 道を知り

6 蒼鷹饑著人 蒼鷹 饑えて人に著く

第六句は、安西都護府の兵士たちが勇猛果敢であることを、『晋書』卷百二十三、慕容垂載記に見える、権翼が慕容垂を譬えて言った、「垂は猶お鷹のごときなり、飢うれば則ち人に付き、飽けば便ち高く颺がり、風塵の会に遇えば、必ず陵霄の志有らん。」という発言を踏まえて述べる。もちろん、この句には、李嗣業麾下の兵が早急に安慶緒の軍を平定してほしいという願

望もこめられているであろう。乾元二年（七五九）秋、秦州で作られた五律「秦州雜詩二十首」（其十一）（『詳注』卷七）にも、飢えた鷹が見える。

3 黃鵠翅垂雨 黃鵠 翅は雨に垂れ

4 蒼鷹饑啄泥 蒼鷹 饑えて泥に啄む

この両句について『詳注』は、「上四は景を写し、下四は時に感ず。鵠翅垂るは、奮飛せんとするも路無きを傷む。鷹 泥に啄むは、一飽 期し難きを慨く。」と言う。実際に眼にした光景なのか、何らかの寓意を含むのか、判然としないが、少なくとも蒼鷹は飢餓に苦しんで泥中に餌を求めているのであって、勇猛心にあふれた鷹ではない。

これ以降、勇敢な存在としての飢えた鷹は杜詩には現れない。飢えた鷹の描写に関しては秦州到着以前と以後とでは明らかな相違が見てとれる。

天宝十載（七五一）正月、四十歳の杜甫は「朝獻太清宮賦」（『詳注』卷二四）などのいわゆる「三大礼賦」を献じて集賢院に待制を命じられた後に、「投簡咸華兩県諸子」（『詳注』卷二。全一四句）を書いて、咸陽と華原の兩県にいる知人に窮状を訴えている。

11 饑臥動即向一句 饑臥すること動もすれば即ち一句に向かう

12 弊衣何啻聯百結 弊衣 何ぞ啻百結を聯ぬるのみならんや

13 君不見空牆日色晚 君見ずや空牆 日色晚し

14 此老無声淚垂血 此の老 声無く涙 血を垂る

第十一・十二句は、第三・四句に「長安 苦寒 誰か独り悲しむ、杜陵の野老 骨折れんと欲す」と述べたことを承けて、「苦寒」を具体的に描いたものである。杜甫は大暦二年（七六七）になってから苦寒を主題とする「前苦寒行二首」（『詳注』卷二二）と「後苦寒行二首」（同上）を書いていますが、そこでは肌を刺すような寒気の過酷さが述べられており、この詩のように飢餓感が述べられることはない。『詳注』は「此れ自ら饑寒の状を述べ。」と簡潔に指摘するにとどまるが、この詩こそが杜甫がみずからの飢えを表現した最初の作品となっている。

杜甫は天宝十四載（七五五）の十月から十一月にかけて奉先県に預けてあつた家族を見舞い、「自京赴奉先県詠懷五百字」（『詳注』巻四）を書いた。

9 窮年憂黎元 窮年 黎元を憂え
10 歎息腸内熱 歎息 腸内に熱す

……

81 老妻寄異県 老妻 異県に寄せ

82 十口隔風雪 十口 風雪を隔つ

83 誰能久不顧 誰か能く久しく顧みざらん

84 庶往共饑渴 庶こいねがくは往きて饑渴を共にせん

85 入門聞号咷 門に入れば号咷を聞く

86 幼子餓已卒 幼子 餓えて已に卒すと

87 吾寧捨一哀 吾寧なんぞ一哀を捨おかんや

88 里巷亦嗚咽 里巷も亦嗚咽す

89 所愧為人父 愧はずる所は人の父と為りて

90 無食致天折 食無くして天折を致まねしを

まず「飢渴」の語から見ておこう。この語は既に『詩経』小雅・采薇に「すなわ載かち渴かき載かち飢かう」などという表現として見えている。

行道遲遲 道を行くこと遅遅たり

載渴載飢 載ち渴き載ち飢う

我心傷悲 我が心傷悲す

莫知我哀 我が哀しみを知る莫し

「飢渴」はもちろん飢え渴くことであるが、望郷の念、もしくは家族との面会を願う心の切実さも表現している。例えば曹植「責躬（上責躬応詔詩）」（『文選』巻二〇）に、

天啓其衷 天 其の衷を啓き

得会京畿 京畿に会することを得たり

遲奉聖顔 聖顔に奉ぜんことを遅おそい

如渴如飢 渴くが如く飢うるが如し

と言ひ、嵇康「贈秀才入軍五首」（其三）（『文選』巻二四）に、

思我良朋 我が良朋を思い

如渴如飢 渴くが如く飢うるが如し

と述べる例などは、『詩経』を典拠としつつも、もはや肉体的に飢渴した状況を表現するものではなく、渴望するというのに等しい。杜甫はこの語を敢えて『詩経』の表現に近づけて用いているのである。

杜甫はこの詩を書く以前にも餓死に言及しなかったわけではない。杜詩における「餓死」の語は以下の詩にも見えている。

「奉贈韋左丞二十二韻」

1 紈袴不餓死 紈袴 餓死せず

2 儒冠多誤身 儒冠 多く身を誤る（『詳注』巻一。全四四句）

「奉贈鮮于京兆二十韻」

39 有儒愁餓死 儒有り餓死せんことを愁う

40 早晚報平津 早晚 平津に報ぜん（『詳注』巻二。全四〇句）

「醉時歌」

19 但覺高歌有鬼神 但だ覺ゆ高歌 鬼神有るを

20 焉知餓死填溝壑 焉いくんぞ知らん餓死して溝壑うすに填められんことを

（『詳注』巻三。全二八句）

この三篇はそれぞれ天宝七載（七四八）、天宝十一載（七五二）、及び天宝十三載（七五四）春の作である。しかも「醉時歌」にも「広文館博士鄭虔に贈る。」という原注があるように、すべてが贈答の詩である。「醉時歌」においてこそくだけた口吻を漏らしてはいるが、いずれも窮状からの救済を訴える内容が含まれており、誇張されている感は否めない。しかし、「自京赴奉先縣詠懷五百字」で「幼子餓えて已に卒す」という体験を述べてからは「餓死」の語を詩中に用いることはない。それだけ幼児を餓死させた体験は痛切なものであったと言えよう。

「喜晴」(『詳注』卷四。全二八句)は至徳二載(七五七)三月、長安の賊中であつての作である。

5 青燐陵陂麦 青燐たり陵陂の麦
6 窈窕桃李花 窈窕たり桃李の花

7 春夏各有実 春夏 各おの実有り

8 我饑豈無涯 我が饑え豈に涯無からんや

この詩の直前に書かれた「雨過蘇端」(『詳注』卷四)では、「諸家 歴し所を憶うに、一飯にして跡便ち掃う、……況や霈沢の垂るるを蒙る、糧粒を得て飢餓に陥らずにすんでいることを感謝している。「喜晴」の第五・六句は、季節が順調に推移すれば、麦や桃李が実を結ぶから飢えが続くことはあるまいという願望を述べたものである。

「彭衙行」(『詳注』卷五、全四六句)は、至徳二載(七五七)閏八月、鳳翔の行在所から鄜州(陝西省富県)の家族のもとへ行く途次、白水の西の同家窪を通つた時に書かれた。前年の天宝十五載五月、杜甫は奉先(陝西省蒲城縣)に疎開させていた家族をさらにその北北西にある白水(陝西省白水縣)に移し、六月には鄜州へと移した。この詩は、その時のことを追憶して書かれたものである。

9 癡女饑咬我 癡女 饑えて我を咬む

10 啼畏虎狼聞 啼いて畏る虎狼の聞こゆるを

11 懷中掩其口 中に懷きて其の口を掩うに

12 反側声愈嘖 反側して声愈いよ嘖

13 小兒強解事 小兒 強いて事を解し

14 故索苦李餐 故に苦李を索めて餐う

……

21 野果充糲糧 野果を糲糧に充て

22 卑枝成屋椽 卑枝を屋椽と成す

23 早行石上水 早に行く石上の水
24 暮宿天辺煙 暮れに宿す天辺の煙

ここに引用した前段部分について、『詳注』は「此れ家を携えて遠行し、兒女 顛連の苦を叙ぶ。」と簡潔に指摘するのみだが、幼い娘が飢えに耐えかねて「人を咬む」という表現だけを取り上げてみても、類似した表現は、杜甫「桃竹杖引、贈章留後」(『詳注』卷一二)に、「噫風塵 瀕洞、豺虎人を咬む」と、盜賊が横行することを比喩的に述べる例があるだけで、ほとんど前例を見ない迫真的な描写である。しかも「彭衙行」は、鄜州での体験から一年余りを経過した後に書かれている。それだけ家族の飢餓状況は杜甫の脳裏に深く刻まれていたということであろう。

五律「晚行口号」(『詳注』卷五)も至徳二載(七五七)八月、鄜州へと赴く途次に書かれた。この詩には「饑鳥」の語が見える。

3 落雁浮寒水 落雁 寒水に浮かび
4 饑鳥集戍樓 饑鳥 戍樓に集まる

『詳注』は二句について、「落雁・饑鳥は、中路 淒涼の状を写し、亦喪敗の余、行人少くして戍卒稀なるを見す。」と言う。また『詳注』は「饑鳥」の典拠として張正見の詩から「饑鳥 箭鋒に落つ」という一句を引いているが、これは張正見「和諸葛覽從軍游獵詩」(『陳詩』卷三)では「饑鳥 劍鋒に落つ」に作っている。しかし杜甫の詩は「落雁」と「饑鳥」を対にしているとところから見て、孟浩然「赴京途中遇雪」(『全唐詩』卷一六〇)の句、

落雁迷沙渚 落雁 沙渚に迷い
饑鳥集野田 饑鳥 野田に集まる

を意識しているのではあるまいか。なお杜甫にはこの詩以外にも飢えた鳥が見えている。宝應元年(七六二)十一月に射洪縣(四川省射洪縣)で書かれた七律「野望」(『詳注』卷一一)でも「饑鳥」の語を用いて、次のように詠ずる。

5 独鶴不知何事舞 独鶴知らず何事あつてか舞う

6 饑鳥似欲向人啼 饑鳥 人に向かつて啼かんと欲するが似し
何事かを訴えるように鳴く飢えた鳥には杜甫自身の姿が投影されており、決して点景として描かれているだけではない。「詳注」が「饑鳥 旅食に感ずる有り、故に啼くを聞きて憐れむ。」と指摘するとおりである。

大暦二年（七六七）、夔州（四川省奉節県）での作とされる五律「朝二首」
〈其一〉（『詳注』巻二〇）には次のように言う。

5 俊鵲無声過 俊鵲 声無くして過ぐ

6 饑鳥下食貪 饑鳥 下りて食すること貪なり

この二句について『詳注』が引く黄生の語に、「饑鳥 貪りて下り食し、俊鵲の其の上にいるを知らず、此れ禄を懐いて讒せらるる者を傷む、故に暫く江潭を借りて以て機を息ましむるのみ。」と言っているように、寓意を含んでいる。

ここで、杜詩に表れる飢えた鳥獣について、既に見た「饑鷹」以外の例をいくつか見ておこう。杜詩にはさまざまな飢えた鳥獣が登場する。大暦二年（七六七）、夔州の漢西での作、「寄劉峡州伯華使君四十韻」（『杜詩詳注』巻一九）には飢えたムササビが登場する。

53 乳贖号攀石 乳贖は号びて石に攀じ

54 飢颺訴落藤 飢颺は訴えて藤より落つ

第五十四句は先にもその一部を引いた張正見「和諸葛覽從軍游獵」に、「騰颺は馬足に斃れ、飢颺は劍鋒に落つ」とあるのを踏まえながら、夔州の独特な風土を詠ずる。

「久雨、期王將軍不至」（『詳注』巻二〇。全一四句）も大暦二年（七六七）冬、夔州で作られた。

7 泉源冷冷雜猿狖 泉源 冷冷として猿狖に雜わり

8 泥濘漠漠飢鴻鵠 泥濘 漠漠として鴻鵠飢う

9 歲暮窮陰耿未已 歲暮 窮陰 耿として未だ已まず

10 人生会面難再得 人生 会面 再びは得難し

冬の長雨のためにぬかるんだ畑で、飢えたクグイが餌を漁っているのである。叙景ではあるが、「鴻鵠」には「鴻鵠之志」の語があるように、本来は大志を抱いている存在である。その鴻鵠も饑餓という現実には勝てない。大暦三年（七六八）の秋、夔州から公安（湖北省公安県）へ移った時の作、「移居公安敬贈衛大郎」（『詳注』巻二二。全一〇句）には次の句がある。

15 入邑豺狼鬪 邑に入れば豺狼鬪い

16 傷弓鳥雀飢 弓に傷みて鳥雀飢う

「鳥雀飢う」、もしくは「雀飢う」という表現は杜甫によって工夫されたものである。この句について『詳注』は、「此れ公安の旅況を叙ぶ。……雀飢うは、旅に窮するを傷む。」と言ひ、趙次公の注は「弓に傷みて鳥雀飢うとは、弓に傷むの鳥雀は、病に創むを以て饑うるを言うなり。上句は以て賊盜に比し、下句は以て窮困の民に比す。」と言っていて、「鳥雀」が杜甫自身の喩えであるのか、困窮した人民の喩えであるのかという点で、『詳注』とは見解を異にしている。いずれにしても公安の地が晩年の杜甫にとって安住の地とは言えなかったことを述べていよう。同じ頃に書かれた「送顧八分文学適洪吉州」（『詳注』巻二二。全六二句）には飢えた魚が登場する。

51 邦以民為本 邦は民を以て本と為す

52 魚饑費香餌 魚饑うれば香餌を費やす

53 請哀創痍深 請う創痍の深きを哀れみ

54 告訴皇華使 皇華の使に告訴せんことを

杜甫はこの四句で、東の吉州へと旅立つ顧戒奢に向かつて、人民の窮状を天子の使者に告げてくれるように要請している。『詳注』は、第五十二句について『五略』を引き、「香餌を費やすは、則ち招徠するの意なり。」と言うが、『管子』（『太平御覽』巻六二四引）に、「善く国を為むる者は、民をして饑魚の餌に帰し、渴馬の飲に走るが若くせしむるなり。」とあるのを用いて、飢え傷ついた人民にたっぷりと食糧を与えることを言ったものである。さて本題にもどろう。「晩行口号」が書かれた翌月の至徳二載（七五七）

九月には、百四十句からなる長篇「北征」(『詳注』巻五)が書かれる。

59 経年至茅屋 年を経て茅屋に至れば

60 妻子衣百結 妻子 衣 百結

61 慟哭松声迴 慟哭すれば松声迴り

62 悲泉共幽咽 悲泉 共に幽咽す

63 平生所嬌兒 平生 嬌とする所の兒

64 顔色白勝雪 顔色 白きこと雪に勝れり

65 見耶背面啼 耶を見て面を背けて啼く

66 垢膩脚不襪 垢膩 脚襪せず

……

……

85 生還对童稚 生還して童稚に対すれば

86 似欲忘饑渴 饑渴を忘れんと欲するに似たり

この詩の第五十七句から第九十二句にかけては鄜州にいた家族の窮乏生活と久しぶりに再会を果たした喜びとが綿々と綴られる。栄養不良で顔が白くなった子どもの様子を「白きこと雪に勝る」と表現するのは類例を見ない。雪のように白いという形容は、花や織物の比喩として用いられるのが普通だからである。「饑渴」の語について『詳注』は『詩経』王風・君子于役を引く。君子于役では妻が行役に出た夫に対して、ひもじい思いをしないようにと呼びかけている。

君子于役 君子 役にゆづく

苟無飢渴 苟いやくしくも飢渴すること無かれ

杜甫もこの句を意識しているであろうが、陶淵明「読山海経十三首」(其十三)(『陶淵明集』巻四)にも、

臨没告飢渴 没するに臨んで飢渴を告ぐるも

当復何及来 当まさに復た何ぞ及ぶべけんや

とあって、「飢渴」の語が用いられ、管仲の臨終にまつわる故事を踏まえた句が見えている。杜甫が飢渴を忘れそうだと言った時には、家族を鄜州に移

動させてから一年を超えるさまざまな生活上の困難が脳裏を過ぎったことであろう。その後、十月になって杜甫は恢復されたばかりの長安に戻る。「送李校書二十六韻」(『詳注』巻六。全五二句)は乾元元年(七五八)の春、左拾遺として門下省にあった時に書かれた。

43 迴身視緑野 身を迴らして緑野を視れば

44 慘憺如荒沢 慘憺として荒沢の如し

45 老雁春忍饑 老雁 春に饑えを忍び

46 哀号待枯麦 哀号して枯麦を待つ

第一句で、蜀地に母を迎えに行く校書郎の李舟を「豪鷹」の子に喩え、第四十七句ではさらに「高飛燕」に喩えたのに対して、第四十五句では自身を「老雁」に喩える。では雁はなぜ飢えているのか。『杜臆』巻二は「公の官に窮すること此の如し。」と言い、『詳注』は「雁の饑うるは、自ら其の貧なるを歎く。」と言う。おそらくは『杜臆』が指摘するように、単に貧窮生活を嘆くのではなく、左拾遺としての職務上の満たされない思いが投影されているのであろう。「老雁」の語自体も杜甫以前には類例を見ない語である。

「送許八拾遺歸江寧觀省、甫昔時嘗客遊此県、於許生処乞瓦棺寺維摩図様、志諸篇末」(『詳注』巻六。全一六句)も「送李校書二十六韻」と同じ頃の作であり、許八拾遺を送別する席で書かれた。

13 看画曾飢渴 画しきりを見て曾に飢渴

14 追蹤恨森茫 追蹤 森茫たるを恨む

と言うのは、かつて自分が若いころに旅し、そして今、許八が帰省する江寧県(江蘇省南京市)の瓦棺寺に描かれていた顧愷之筆の維摩詰図の複写を彼に乞うたことを回顧する。『詳注』が『詩経』小雅・采薇の、「載ち飢え載ち渴く」の句を引くように、この「飢渴」は激しく渴望することを言う。

五律「贈畢四曜」(『詳注』巻六)も左拾遺として長安にあったときに書かれた。冒頭の四句を引く。

才大今詩伯 才は大なり今の詩伯

家貧苦宦卑 家は貧にして宦の卑きに苦しむ

飢寒奴僕賤 飢寒 奴僕賤しみ

顔状老翁為 顔状 老翁為なり

第三句は畢曜が奴僕にすら蔑まれるような貧困にあることを言うが、ほぼ同時の作である「偏側行、贈畢四曜」（『詳注』卷六）には、自身が道を隔てて住んでいる畢曜を訪ねようとしてもかなわないことを「我貧にして乗無きも足無きに非ず」と言っているから、左拾遺にあったとはいえ困窮した生活を送っていた杜甫の姿も投影されているであろう。「飢寒」の語は陶淵明がしばしば用いている。

「勸農」

37 儋石不儲 儋石 儲えずんば

38 飢寒交至 飢寒 交こもとも至らん （『陶淵明集』卷一。全四八句）

「飲酒二十首」〈其二〉

5 九十行帶索 九十 行くゆく索なわを帯ぶ

6 飢寒況當年 飢寒 況んや当年をや （『陶淵明集』卷三。全八句）

「詠貧十七首」〈其一〉

9 量力守故轍 力を量りて故轍を守るに

10 豈不寒与飢 豈に寒さと飢えとあらざらんや

11 知音苟不存 知音 苟も存せずんば

12 已矣何所悲 已んぬるかな何の悲しむ所ぞ （『陶淵明集』卷四。全一二句）

「詠貧十七首」〈其五〉

5 芻藁有常温 芻藁 常温有り

6 採菖足朝餐 菖を採るも朝餐足る

7 豈不実辛苦 豈に実に辛苦ならざらんや

8 所懼非飢寒 懼おそるる所は飢寒に非ず （『陶淵明集』卷四。全一二句）

「勸農」の場合は、耕作に励んで蓄えをしなければ飢えと凍えが襲うだろうと、農作業に精を出すことを言うが、「飲酒二十首」と「詠貧十七首」で

は、自分の生き方を守り続ければ飢えや凍えがつきまとうことは当然であると、後漢の袁安の故事を踏まえて述べる。しかし、そうは言いつつも我が子に向かつては、「与子儼等疏」（『陶淵明集』卷七）で、「自ら己れの為に量るに、必ずや俗患を貽おとさんと。僂俛 世を辞し、汝等をして幼くして飢寒せしむ。」と述べて、自分の信念に従った結果として、現実には幼子に飢えと凍えを強いることになったと弁解せざるを得ないのである。陶淵明の詩においては飢寒の語をみずからの飢餓体験と直接に結びつけて用いる例はないが、杜甫はどうであろうか。「贈畢四曜」を書いて以後も、「飢寒」の語はしばしば見えている。

乾元元年（七五八）六月、杜甫は華州司功參軍として任地に赴いた。「遣興三首（吾今日夜憂）」〈其一〉（『詳注』卷六。全一〇句）は華州（陝西省華縣）で書かれた。

1 我今日夜憂 我今 日夜憂う

2 諸弟各異方 諸弟 各おのの方を異にす

…… ……

5 避寇一分散 寇を避けて一たび分散し

6 飢寒永相望 飢寒 永く相い望む

安史の乱による混乱を避けるために散り散りになった兄弟を思っ作ったのが〈其一〉である。杜甫が骨肉を思う際にまず念頭に浮かぶのは、彼らが飢寒にさいなまれていないか、ということであった。五律「憶弟二首」〈其一〉（『詳注』卷六）にも濟州（山東省茌平県）にいる弟を気遣う心情が詠じられる。この詩の原注に、「時に帰りに河南の陸渾莊に在り。」と言うから、乾元二年（七五九）の初春に書かれたものである。

1 喪乱聞吾弟 喪乱に聞く吾が弟

2 饑寒傍濟州 饑寒 濟州に傍そばうと

『詳注』は「饑寒」の語にはほとんど注を施さないが、この詩においては例外的に「後漢書に、道路に飢寒すと。」と指摘する。この一文は、実際は

『漢書』卷一百上、叙伝、及び『文選』卷五十二に載せる班彪の「王命論」の一節であり、そこでは次のように言っている。

夫れ餓饉 流隸、道路に飢寒し、裋褐の褻、儋石の畜え有らんことを思う。願う所は一金に過ぎざるも、然るに溝壑に転死するに終わる。

この一文は「何となれば則ち貧窮も亦命有ればなり。」と続くのだが、仮に杜甫がこの一節を念頭に置いていたとしても、班彪が言うほどの諦念には達していなかっただろう。なお「憶弟二首」は李白や元結と交流のあった于逖の「憶舎弟」（『篋中集』、『唐詩紀事』卷二七、『全唐詩』卷二五九）と、飢寒に苦しみながら流浪する弟を思う作品である点で、発想を通わせている。冒頭の四句を引いておこう。

袁門少兄弟 袁門 兄弟少なし

兄弟唯兩人 兄弟 唯だ兩人のみ

飢寒各流浪 飢寒 各おの流浪す

感念傷我神 感じ念^{おも}えば我が神を傷ましむ

二 秦州から成都へ

乾元二年（七五九）七月、官を棄てて家族と秦州に旅立った杜甫は十月には秦州を去り、同谷を経て年末には成都にたどり着く。この三箇月に満たない間に書かれた詩は連作を一篇と数えても三十篇近くに達し、饑餓に関する描写がとりわけ多く現れる。以下、これらの詩について見てみよう。

「別賛上人」（『詳注』卷八。全二〇句）は乾元二年（七五九）十月、秦州を去る時の作である。

11 天長閑塞寒 天長くして閑塞寒く

12 歳暮饑凍⁸逼 歳暮 饑凍^{せま}逼る

13 野風吹征衣 野風 征衣を吹き

14 欲別向曛黑 別れんと欲すれば曛黑に向かう

第十二句は秦州を離れる理由が、飢えと凍えにあることを述べているが、「饑凍」の語は『漢書』、『後漢書』や『新・旧唐書』などの史書にはしばしば見られる語であっても、杜甫以前の詩には見られない。先行例を挙げるとすれば陶淵明「歸去來兮辭」（『陶淵明集』卷五）の序の、「飢凍は切なりと雖も、己に違えば交ごも病む。」という一文に見える「飢凍」であろう。杜甫はもっぱら散文に用いられていた語に、詩語としての価値を新たに見出したのである。

秦州を発って同谷に至る途次の作である「赤谷」（『詳注』卷八。全一六句）では幼い子どもたちが飢えに苦しんでいることを言う。

9 山深苦多風 山深くして風多きに苦しみ

10 落日童稚飢 落日 童稚飢う

……

15 常恐死道路 常に恐る道路に死して

16 永為高人嗤 永く高人に嗤^{わら}わるるを為さんことを

また、同谷到着の直前に書かれた「鳳凰台」（『詳注』卷八。全二九句）では、鳳凰台という名に触発された思いを述べて、次のように言っている。

5 山峻路絶蹤 山峻^{けわ}しくして路 蹤^{あと}を絶ち

6 石林気高浮 石林 気高く浮かぶ

7 安得万丈梯 安くんぞ万丈の梯を得て

8 為君上上頭 君の為に上頭に上らん

9 恐有無母雛 恐らくは母無きの雛有りて

10 飢寒日啾啾 飢寒 日に啾啾たらん

11 我能剖心血 我 能く心血を剖^さきて

12 飲啄慰孤愁 飲啄 孤愁を慰めん

「赤谷」で我が子の飢えを詠じた杜甫は、この詩では鳳凰という語から母を失った鳳凰の雛が飢え凍えていることに想念を及ぼし、自分の心臓をえぐって血を飲ませてやりたいとまで言う。飢寒にあえぎ鳴く雛には寓意があ

るとするのがおおかたの指摘であるが、旅の途次にある自身の血を吐くような思いも投影されているであろう。

同谷で書かれた「同谷歌七首」(其七)〔詳注〕卷八)では「飢走」の語が用いられる。冒頭に次のように言う。

男兒生不成名身已老 男兒生まれて名を成さず身已に老ゆ

三年飢走荒山道 三年 飢走す荒山の道

第二句は『詳注』が、「三年山に走るは、至徳二載より乾元二年に至るまで、鳳翔に奔り、華州に貶せられ、秦隴に客となり、同谷に遷るを謂うなり。」と指摘するとおりの内容である。ただし「飢走」の語は杜甫以前の詩文には見えない。その後、例えば宋・李綱(一〇八三―一一四〇)の「読四家詩選四首 子美」(『梁谿集』卷九)の冒頭に、

杜陵老布衣 杜陵の老布衣

飢走半天下 飢走すること天下に半ばす

という句がある。李綱にとっては「飢走」が、杜甫の困難な人生を象徴する語として把握されていたのであろう。

同谷での滞在を終えて成都へ向かう時の「発同谷県」〔詳注〕卷九。全二〇句)には「飢愚」の語が見えている。この語も杜甫が初めて用いたものであつて類例を見ない。冒頭の四句を引こう。

賢有不黔突 賢にも突を黔くせざる有り

聖有不煖席 聖にも席を煖かにせざる有り

況我飢愚人 況んや我 飢愚の人をや

焉能尚安宅 焉くんぞ能く尚宅に安んぜん

第三・四句は冒頭の二句を承けて、墨子のような賢人でも孔子のような聖人でも落ち着いているいとまがなかったのだから、自分のような飢えにかられる愚か者には安住できる家などないことを言う。「飢愚」の語が注目されることは少ないが、わずかに明・唐元竑『杜詩攷』卷二が第三・四句を引いて、「飢愚は紐字なり、自ら笑ひ自ら憐れむ。」と言っている。かなめとなる

語であつて自嘲を含んでいるといふのであろう。

この詩を書き、同谷を発つて以後、成都にたどりつくまでの紀行詩中の饑餓に関わる語が見えるを詩を以下に列挙してみよう。

「飛仙閣」

11 往来雑坐臥 往来雑わりて坐臥し

12 人馬同疲勞 人馬 同に疲勞す

13 浮生有定分 浮生 定分有り

14 飢飽豈可逃 飢飽 豈に逃る可けんや

15 嘆息謂妻子 嘆息して妻子に謂う

16 我何随汝曹 我何ぞ汝が曹を随うるやと (『詳注』卷九。全一六句)

「石櫃閣」

9 羈棲負幽意 羈棲 幽意に負き

10 感嘆向絶跡 感嘆 絶跡に向かう

11 信甘孱懦嬰 信に甘んず孱懦に嬰るに

12 不独凍餒迫 独り凍餒に迫らるるのみにあらず

13 優游謝康樂 優游す謝康樂

14 放浪陶彭沢 放浪す陶彭沢

15 我衰未自由 我衰えて未だ自由ならず

16 謝爾性所適 爾らが性の適う所に謝る (『詳注』卷九。全一六句)

「鹿頭山」

1 鹿頭何亭亭 鹿頭 何ぞ亭亭たる

2 是日慰飢渴 是の日 飢渴を慰む

3 連山西南断 連山 西南に断え

4 俯見千里豁 俯して千里豁くるを見る (『詳注』卷九。全二四句)

「飛仙閣」に見える「飢飽」の語は、平易な語のようでありながら、杜甫以前の詩には用例を見ない。第十三・十四句は、人生には定めがあり、飢餓と飽食から逃れることはできないと述べて、みずからを納得させようとする

ことを言うのではあるが、飢餓に重点が置かれていることは言うまでもない。それは第十二句が、曹操「短歌行」（『文選』卷二七）の、「行き行きて日に已に遠く、人馬 同時に飢う」を下敷きにしてのことからも明らかである。なお末二句は、『説杜心解』卷一に、「結は、笑貌と歎声と俱に有り。」という指摘があるように、飢えに迫られた結果として困難な旅を続けざるを得なかったことを自嘲的に述べていよう。

「石櫃閣」には、「凍餒」の語が見える。この語は『左伝』昭公三年の条に、「公聚は朽蠹して、三老は凍餒す。」と見えるのが早い例だが、杜甫以前の唐詩には見られない語であり、ここは『詳注』が陶淵明の詩を典拠として引くように、「飲酒二十首」（其十九）（『陶淵明集』卷三。全一四句）を踏まえていよう。

1 疇昔苦長飢 疇昔 長飢に苦しみ

2 投未去学仕 未を投じて去きて学仕す

3 将養不得節 将養 節を得ず

4 凍餒固纏己 凍餒 固より己に纏う

陶淵明は青年時代を回顧して、三十歳になろうとするころ、飢えに苦しむあまり役人になったが、それでも飢えと凍えにつきまとわれたと述べているが、身体の虚弱さに「凍餒」が加わったことは杜甫にとって切実な問題であった。なお「凍餒」は、天寶十三載（七五五）、百日ほど病んでいた杜甫が病後に王倚を訪ねた時の作である「病後過王倚飲贈歌」（『詳注』卷三。全二八句）にも見えている。制作時期は遡るがここで取り上げておこう。

5 且過王生慰疇昔 且つ王生に過りて疇昔を慰む

6 素知賤子甘貧賤 素知る賤子が貧賤に甘んずるを

7 酷見凍餒不足恥 酷だ見る凍餒の恥ずるに足らざるを

8 多病沈年苦無健 多病 沈年 健無きに苦しむ

「鹿頭山」の「飢渴」の語について『詳注』は応璩の詩から、「以て飢渴の懐いに副わん」という一句を引いている。しかしこれは応璩「侍五官中郎將

建章台集詩」（『文選』卷二〇）中の末聯、「凡百 爾の位を敬み、以て飢渴の懐いに副わん」という句であるとするのが正しい。また『九家集注杜詩』卷六は、陸機「為顧彦先贈婦二首」（其二）（『文選』卷二五）の末聯、「願わくは金石の軀を保ち、妾が長飢渴を慰めんことを」を引いている。これらの先行例においてはいずれも精神的に渴望することを言う。鹿頭山は成都の北方の要衝の地であり、劍門を越えてここに至ると眺望が開け、成都への旅程は終わりに近づく。従って『詳注』が「此れ初めて蜀地に至って喜ぶ。」と言ひ、『義門読書記』卷五十一に、「茲に及んで險阻尽き、顧みて飢渴を慰む。」と言っているように、肉体的な飢餓を表すよりも、渴望してきた成都への到着が現実のものになったことを言うと言った方がよいだろう。

三 成都から夔州へ

続いて成都到着後、成都とその近辺を往来していた時期の詩を見ていこう。七律「狂夫」（『詳注』卷九）は、成都に着いた翌年の上元元年（七六〇）夏、完成して間もない浣花草堂で作られた。

5 厚禄故人書断絶 厚禄の故人 書は断絶し

6 恒飢稚子色凄凉 恒飢の稚子 色は凄凉たり

秋の収穫を目前にして、杜甫の子どもたちはひもじい思いをしていたのであろう。「恒飢」はいつも腹を空かせている意ではあるが、この語も杜甫以前には見られない。宋代に入ると陳傅良（一一三七―一二〇三）の「再用韻呈德修」（『止齋集』卷二）に、「桑麻競わず蒿は屋を押し、厚禄 書断えて児は恒に饑う」という、明らかに杜甫の「狂夫」を意識した用例が見出せるが、これも稀有な例である。

「因崔五侍御寄高彭州一絶」（『詳注』卷九）は、上元元年（七六〇）の秋、崔五侍御を通じて彭州（四川省彭県）の刺史であった高適に援助を依頼した詩である。冒頭に次のように言う。

百年已過半 百年 已に半ばを過ぎ
秋至転飢寒 秋至つて転た飢寒なり

収獲の秋を迎えたにもかかわらず、飢餓が解消されることはなかった。杜甫は浣花草堂の周辺に野菜などを植えていたが、思うような収獲は得られなかったであろう。『詳注』が「秋至つて、収獲の時、宜しく飢寒を免るべきに、茲に然らず、故に転たと曰う。」と指摘するとおりである。

「贈別賀蘭鈜」(『杜詩詳注』卷一二。全一六句)は広徳二年(七六四)春に書かれた。

5 老驥倦驥首 老驥 首を驥ぐるに倦み

6 蒼鷹愁易馴 蒼鷹 馴れ易きを愁う

7 高賢世未識 高賢 世未だ識らず

8 固合嬰饑貧 固より合に饑貧に嬰るべし

第七・八句は、賢人が世間に知られる以前は飢餓と貧困につきまとわれるのは当然なことだと言って、江南へと旅立つ賀蘭鈜を激励するのだが、自身の現状に対する確認の意味合いも有する。「饑貧」の語は、杜甫以前には史書にこそ散見するが、詩には類例の見えない語である。なお杜甫は賀蘭鈜にあてた詩としては「寄賀蘭鈜」(『詳注』卷一四)も書いていて、末聯で「云う勿かれ俱に異域なりと、飲啄 幾回か同じき」と言い、本来は鳥が飲食することを表現する「飲啄」の語を用いて賀蘭鈜を思っている。賀蘭鈜との交際においては飲食の場が強く意識されていたということであろう。

「別唐十五誠因寄礼部賈侍郎」(『詳注』卷一四。全三二句)は広徳二年(七六四)の作であり、次の句がある。

15 蕭條四海内 蕭條たり四海の内

16 人少豺虎多 人少くして豺虎多し

……

19 飢有易子食 飢えては子を易えて食らう有り

20 獸猶畏虞羅 獸すら猶お虞羅を畏る

第十九句は、世の中が混乱しており、人々は子供を取り換えて食べるという惨状に陥っていることを言うが、この句は『左伝』宣公十五年の条の、華元が楚の子反に宋の窮状を訴えた「子を易えて食らい、骸を析きて以て鬻ぐ。」という発言を踏まえる。宋・劉攽『中山詩話』は杜甫の詩の二句を引いて、「此れ等の句の若きは、其の含蓄は深遠にして、殆ど模倣す可からず。」と言う。詩には用いられることのない表現であることは確かである。

「莫相疑行」(『詳注』卷一四。全一二句)は永泰元年(七六五)の春、もしくは夏に書かれたとされる。しかし杜甫が誰に対して疑念をほらそうとしたのかははっきりしない。

7 往時文采動人主 往時 文采 人主を動かし

8 此日飢寒趨路旁 此の日 飢寒 路旁に趨る

第七句は、大暦十年(七五二)、「三大礼賦」を玄宗に献じて「集賢の学士」からも注目されたことを指し、続く第八句では、今は飢えと凍えにかられて道ばたを走り回ることを、過去の栄光と対比して言う。「飢寒」の語はしばしば見られたが「路傍(旁)に趨る」の語は杜甫が工夫したものである。この句に言及する者は少ないが、劉克莊『後村詩話統集』卷一は、李白の「東武吟」(『李太白集』卷四)と、同じく「贈溧陽宋少府陟」(『李太白集』卷九)を引いて、「悲壯なること略同じ。」と言っている。杜甫にとって朝廷にその才能を認められることの対極に位置する事態が飢寒に追い立てられることであつたのである。

永泰元年(七六五)五月に成都を離れた杜甫は雲安で療養した後、翌年の暮春には夔州に移る。「八哀詩」(『詳注』卷一六)は、黄鶴の注が指摘するように、一時期の作ではないが、次に見る二篇はともに大暦元年(七六六)秋の作とされるので、ここで触れておこう。「八哀詩・故秘書少監武功蘇公源明」(『杜詩詳注』卷一六。全六四句)には次のように言う。

5 時下菜蕪郭 時に下る菜蕪の郭

6 忍饑浮雲巘 饑えを忍ぶ浮雲の巘

7 負米晚為身 負米 晩に身の為にし

8 每食儉必法 食らう毎に儉必ず法たり

蘇源明の伝は『新唐書』卷二〇二、文苑伝中にある。そこでは彼の若いころについて「少くして孤なり、徐・亮に寓居す。」と記されるのだが、これは「八哀詩」の冒頭に「武功 少きや孤なり、徒步 徐・亮に客たり」と述べるのを取り入れたものである。「忍饑」という表現は先に引いた「送李校書二十六韻」にも、「老雁 春に饑えを忍ぶ」と見えていた。この詩では、蘇源明が、東岳泰山において飢餓に耐えながら古典の研鑽に励んだことを言う。しかし、「忍饑」という語も杜甫以前には少ない。沈佺期「初達驩州」(『全唐詩』卷九五)に、「夜は則ち飢えを忍んで臥し、朝は則ち病を抱いて走る」とあるのがわずかな先行例である。

前詩と同じ頃の作とされる「八哀詩・故著作郎貶台州司戸綦陽鄭公虔」(『杜詩詳注』卷一六、全六四句)には、

41 老蒙台州掾 老いて蒙る台州の掾

42 遐泛浙江槩 遐かに泛かぶ浙江の槩

43 履穿四明雪 履は穿たる四明の雪

44 饑拾溪檣饑 えては拾う檣溪の檣

と言う。引用した部分は、鄭虔が安祿山によって水部郎中の官を授けられたために、死罪は免れたものの台州(浙江省臨海市)の司戸参軍事に左遷され、辛酸を嘗めたことを言う。四明は浙江省東部の山、檣溪は浙江省天台県にある川。第四十四句について、『詳注』は「履穿たれ檣を拾うは、貧困にして自ら給すること能わず。」と述べ、『莊子』盗跖篇の、「有巢氏の民」を説明した一文を引く。

古者は禽獸多くして人民少なし。是に於いて民は皆な巢居して以て之を避く。昼は橡栗を拾い、暮れば木上に栖む。

『新唐書』卷二〇二、鄭虔伝には台州における鄭虔の生活に関する記述はない。なお「饑えて拾う」という表現も杜甫以前の詩には見えない。

「贈蘇四侯」(『詳注』卷一八、全三〇句)は、大暦元年(七六六)に夔州で書かれた。杜甫の旧友の子である蘇侯が湖南監察使崔瓘の幕府へと旅立とうとするのに際して贈った詩である。

21 肉食晒菜色 肉食は菜色を晒い

22 少壯欺老翁 少壯は老翁を欺る

……

29 一請甘饑寒 一に請う饑寒に甘んぜんことを

30 再請甘養蒙 再まに請う養蒙に甘んぜんことを

この詩の直前に書かれた「君不見簡蘇侯」(『詳注』卷一八)には、「君今幸いに未だ老翁と成らず、何ぞ恨まん憔悴して山中に在るを」と言っているから、蘇侯は決して恵まれた境遇にあつたわけではない。第二十九・三十句は、その蘇侯に向かって、飢寒に甘んじていれば肉食する高貴の者たちにあざ笑われることもなく、正道を守ってさえいれば血氣盛んな若者たちに侮られることもないと、ねんごろに戒めているのである。

五律「独坐二首」(其一) (『杜詩詳注』卷二〇)は、大暦二年(七六七)

の秋に夔州の東屯、もしくは漢西で書かれた。

5 暖老思燕玉 老いを暖めんとして燕玉を思い

6 充饑憶楚萍 饑えに充てんとして楚萍を憶う

これに先立つ詩に「茅堂檢校取稻二首」(『詳注』卷二〇)があり、(其一)で新米を食べた喜びを述べて、「紅鮮 終日有り、玉粒 未だ吾に慳まず」と言うし、「刈稻了詠懷」(同上)では米の収穫を終えたことを言うから、この詩を詠じた時に杜甫が飢餓に迫られていたということではあるまい。『杜臆』卷九は、次のように述べている。

暖老・充飢の語は、無聊の妄想にして、蓋し戯言なり。……老いを暖むるには被を須い、飢えに充つるには食を須う、被無く食無くして、想い燕玉・楚萍に及ぶ、此れ人間には必ず得可からざるの物にして、衣食の得難きこと之の如し、語は諛るに似て情は則ち苦しむ。

二句は「戲言」ではあるが、つねに衣食の心配につきまとわれている苦衷が含まれているという指摘は的を射ていよう。

五律「雨四首」(其四) (『詳注』卷二〇) も、同じ大暦二年(七六七)の冬、瀼西での作である。起聯と頌聯を引こう。

楚雨石苔滋 楚雨 石苔滋い

京華消息遲 京華 消息遲し

山寒青兕叫 山寒くして青兕叫び

江晚白鷗飢 江晚くれて白鷗飢う

カモメは同じ詩の(其二)にも、「馬に上り回かえりては出づることを休やめ、鷗を看み坐して移らず」と見える。杜甫が見つめていたカモメは、夕暮れになつても降り止まぬ雨の中、ひもじそうにしているのである。立ち尽くすカモメには、届かぬ便りを待ち続ける杜甫の姿が重なつていよう。

四 夔州を出て没するまで

大暦三年(七六八)の正月に夔州を離れた杜甫は長江を下つて巫山県、峡州、松滋県を経、三月上旬に江陵(湖北省荆沙市荊州区)に到着する。「秋日荆南述懷三十韻」(『詳注』卷二)は、大暦三年(七六八)の秋、公安に移る前に、江陵での生活を回顧した詩であり、次のように述べている。

29 蒼茫歩兵哭 蒼茫 歩兵哭し

30 展転仲宣哀 展転 仲宣哀しむ

31 饑藉家家米 饑かえては家家の米を藉かり

32 愁徹処処杯 愁めいては処処の杯を徹めす

「饑藉」という語の用例が他に求められないばかりでなく、飢えに迫られては米を借りるために家々を訪ねて歩き、愁いを晴らそうとしてはあちらこちらの酒宴に呼ばれて行くという表現も類例を見ないものである。『詳注』は、第三十一・三十二句について「客況 無聊なり、故に米を借り杯を尋

ぬ。」と指摘しているが、単に旅にあつて楽しまない状況を言うのではなく、第二十五・二十六句に、「揺うごかすに苦しむ求食の尾、常に曝さらす報恩の鰓さかい」と言つたのを承けて、なりふり構つてはられない窮状にあつたことを述べていると考えられる。

「舟出江陵南浦、奉寄鄭少尹審」(『詳注』卷二二。全二四句)は大暦三年(七六八)の秋、江陵から公安へ移ろうとしていた時の作である。

1 更欲投何処 更に何れの処にか投ぜんと欲する

2 飄然去此都 飄然として此の都を去る

…… ……

7 百年同棄物 百年 棄物に同じ

8 万国尽窮途 万国 尽ことごとく窮途

…… ……

13 棲託難高臥 棲託 高臥し難く

14 饑寒迫向隅 饑寒 向隅に迫る

15 寂寥相向沫 寂寥 相あひまつ沫うす

16 浩蕩報恩珠 浩蕩たり報恩の珠

この詩は冒頭の二句から、すでに悲壯感が漂っている。身を寄せて落ち着ける場所もなく、飢えと凍えに駆られるようにして、寒さが忍び寄る秋空のもと、杜甫一家は公安へと向かうのである。『詳注』は第十三・十四句について、「棲託を謀らんとして安臥する能わず、総て寒の駆る所と為るのみ。」と言う。このころの杜甫は、ほとんど前途に希望を持ってなくなつていた。「地隅」(『詳注』卷二三)でも、「年年 故物に非ず、処処 是れ窮途」と述べ、「窮途」の語を用いて閉塞感を吐露している。

「早発」(『詳注』卷二二。全二四句)は、大暦四年(七六九)正月に岳陽を離れ、湘江を溯つて湘潭県の西の鑿石浦、空靈岸、花石戍を経て、さらに潭州(湖南省長沙市)へと向かった時の作である。末尾の四句を引こう。

薇蕨餓首陽 薇蕨 首陽に餓え

粟馬資歷聘 粟馬 歷聘に資す

賤子欲適從 賤子 適從せんと欲し

疑悞此二柄 疑悞す此の二柄

「薇蕨」の句が、『史記』卷六十一、伯夷列伝を踏まえていることは見やすい。類似する句は、東方朔「七諫」沈江にも、「世俗更りて變化し、伯夷は首陽に餓う」とある。「粟馬」の句は諸注ともに「旧注」を引いて、蘇秦と張儀が六国から粟馬をもって迎えられた故事を指すとす。ただし、『史記』卷六十九、蘇秦列伝と、同じく卷七十、張儀列伝には、「粟馬」の語はない。四句について、邵宝『刻杜少陵先生詩分類集註』卷一に、「夷齊の隠餓に效わんと欲するか、儀秦の幸顕に效わんと欲するか、隠顕の二柄は中に疑惑し、未だ適従する所を知らざるなり。」という指摘がある。伯夷・叔齊のように節を守って隠れた揚げ句に餓死するか、また張儀と蘇秦のように榮達して世間に顕れるか、二つの道があるが、どちらに従ったものか決めかねているというのである。しかし杜甫にとって、實際上、後者の道は閉ざされていた。この詩では伯夷・叔齊が餓死したことは仮の進路として想定されているだけだが、伯夷・叔齊の最期は、杜甫にとって決して架空のことではなかった。この詩より少し前に書かれた「上水遣懷」（『詳注』卷二二）では、「驅馳す四海の内、童稚 日びに口に糊す、……羸骸 將に何くにか適かんとす、險を履み顔 益厚し」と述べ、子どもたちに食事を摂らせるためにあちこちを駆け回っていると述べているからである。

大曆四年（七六九）の冬、杜甫は潭州にいた。「奉送魏六丈佑少府之交広」（『詳注』卷二三。全五二句）は、魏佑が南方の交広（交州と広州）へと赴くのを送った詩である。

5 鄭公四葉孫 鄭公 四葉の孫

6 長大常苦饑 長大 常に饑えに苦しむ

7 衆中見毛骨 衆中 毛骨を見れば

8 猶是麒麟兒 猶お是れ麒麟兒なり

第六句は、太宗・李世民に仕えた名臣、魏徵（五八〇〜六四三）の四代目の子孫にあたる魏佑が飢えに苦しんでいることを言う。諸注ともに「苦饑」の語には注を施さないが、この語は曹丕「善哉行」（『文選』卷二七）に、「山上りて薇を採り、薄暮 饑えに苦しむ」と見えるのははじめ、唐詩においても杜甫と交遊のあった孟雲卿の「悲哉行」（『全唐詩』卷二四、卷一五七）には、旅人の飢えを詠ずる、「行人は前程を念い、參辰の没するを待たず、朝には亦常に饑えに苦しみ、暮れにも亦常に饑えに苦しむ」という句が見えている。比較的用例の多い語である。

「白晷行」（『詳注』卷二三。全八句）も前の詩と同じ頃の作である。

3 故畦遺穗已蕩尽 故畦の遺穂は已に蕩尽す

4 天寒歲暮波濤中 天は寒く歳は暮る波濤の中

5 鱗介腥膻素不食 鱗介の腥膻なるは素より食らわず

6 終日忍饑西復東 終日 饑えを忍んで西し復た東す

『詳注』は、「遺穂は蕩尽し、陸に糧無し。腥膻は食らわず、水にも又饑う。」と言う。「杜臆」卷九ではこの詩を夔州での作と考えているが、次のように説明を加える。

遺穂は蕩尽して、鵠は食を得る所無く、化して鳧と為らざるを得ず。而るに波濤の中に出没すれば、乃ち又腥膻を食らわず、所以に饑えを忍びて西し復た東す、良に悲しむ可きなり。

白いカモが杜甫自身を喩えていると見なすことは諸注が一致している。田畑の落ち穂は食べ尽くされ、水中の魚介もなまぐさくて食べられない。だから白鳧のように飢えを耐え忍びつつ、放浪の旅を続けざるを得ないのである。「忍饑」の語は、先に引いた「八哀詩・故秘書少監武功蘇公源明」にも見えていた。杜甫は「朱鳳行」（『詳注』卷二三）でも、自らを鳳凰に喩えて、「願わくは竹実を分かちて螻蟻に及ぼさん、鳴梟をして相い怒号せしむるに忍びんや」と言う。自分が飢餓状態にありながらも、他の貧窮に苦しむ者の救済を願わざるを得ないのである。

おわりに

以上、杜甫の飢餓表現をたどって見た。杜甫が生涯にわたって飢餓を表現し続けたことが容易に見て取れよう。もちろん、「飢（饑）」「餓」「餒」といった語が用いられなくとも飢餓が詠じられることはある。先にその一部を見た「同谷歌」(其二)には、「此の時子と空しく帰り来たれば、男は呻き女は吟じ四壁静かなり」と、子どもたちが空腹にたえかねてうめく姿が詠じられるし、上元二年(七六一)、成都での作、「百憂集行」(『杜詩詳注』巻一〇。全一二句)の末尾には次のように言っている。

9 入門依旧四壁空 門に入れば旧に依って四壁空し
10 老妻親我顔色同 老妻 我を親て顔色同じ

11 癡兒不知父子礼 癡兒は知らず父子の礼

12 叫怒索飯啼門東 叫び怒り飯を索めて門東に啼く

一篇は「彭衙行」での飢餓の描写と類似しているが、末句について『詳注』が「飯を索めて門東に啼くは、飢えて食を拵ばざるの情を説きて最も惨まし。」と指摘するように、父への礼儀も忘れ、空腹にたえかねて泣く幼子の姿が詠じられている。したがって、杜甫がその詩に詠じた飢餓に関わる描写は、ここまでに見た例よりもさらに多くなる。

杜甫以前にも飢餓に関する表現はすでに『詩経』に見えていたし、曹操の楽府にも見えていた。しかし、総じて言えば陶淵明を除いて、それほど多くの詩に見られるわけではない。わずかに謝靈運の作品に「饑饉」「苦寒行」(『飢渴』(折楊柳行二首)(其一))、「朝饑」(『君子有所思行』)などの語が散見する程度であって、しかも楽府に限定される。では、このように飢餓に関する表現が少なかったのは、どのような理由からであったのだろうか。先に見た「莫相疑行」(『詳注』巻一四)の『詳注』は、明・胡夏客、字は宣子の説を引きながら、次のように述べている。

胡夏客云、「往時 文彩 人主を動かし、此の日飢寒 路旁に趨る」

は、懐抱 斯の如きと雖も、亦品地 失すること有り。凡そ詩は、必ず憂君・憂国を説けば、太だ迂にして、但だ愁飢・愁寒を言えば、太だ卑し。杜公も此の二病有ることを免れずと。今按ずるに、公の君国を憂うるは至情に根ざし、飢寒を愁うるは真情より出ず、若し此れを避けて泛く景物を言わんと欲すれば、反って本来の面目に非ず。宣子の説くと、未だ少陵の知音と為さず。

胡夏客が、飢寒に迫られて走り回るといふ表現は品格に欠けると言ったのに対して、仇兆鰲は、それは「至情」に根ざしたものであると反駁しているのである。つまり、飢寒の苦しみを詠ずることは詩人にとって品性の劣る行為だと見なす風潮が確かに存在したことになる。

杜甫がこれほど多くの飢餓に関する表現を詩中に残したのは、陶淵明に対する共感が底流にあったことは否定できない。しかし杜甫は、多くの詩人たちが忌避し、あるいは抑制してきた一線を明らかに越えたのである。飢餓について表現することなくしては「至情」が吐露できないと考えたからであろう。しかもその際には既成の語を安易に踏襲することはしなかった。飢餓を述べる多くの語は、たとえ史書には見られたとしても、詩において通常は用いられない語であった。これらを詩語として用いたのは杜甫による工夫の表れである。繰り返しになるが、杜甫の飢餓表現は、杜甫の抱える現実を忠実に表現したいという強靱な意志の表れだったと言える。

では杜甫の試みは後世の詩人たちによって等閑視される結果に終わったのであろうか。部分的には本文でも言及したが、さらに一例を挙げれば、「百憂集行」の第十一・十二句は、陸游に強い印象を与えている。陸游「夙興弄筆偶書」(『劍南詩藁』巻二六)には、次のような句がある。

杜老慣聽兒索飯 杜老 聴くに慣る兒の飯を索むるに

鄭公何啻客無氈 鄭公 何ぞ客に客 氈無きのみならんや

これも飢餓に関する表現が杜甫の記憶と分かちがたく結びついていった傍証となるであろう。

注

- (1) このことについては、拙稿「杜甫『同谷歌』の『狙公』について」(中国化学会「中国文化」六八、二〇一〇)で述べたことがある。
- (2) ただし「贈別賀蘭鈞」(『詳注』巻一二)の第六句「蒼鷹愁易馴」について、「詳注」は、「蒼は、一に飢に作る。」と言う。第八句には「固合嬰饑貧」と言うから、「蒼鷹」に作るほうが妥当であろう。
- (3) 『佩文齋詠物詩選』巻一三〇も同じ。『詳注』の引く一句は、『淵鑑類函』巻二〇九に見えている。「饑鳥」の典故として早い例は、沈佺期の五律「被試出塞」(『全唐詩』巻九六)であろう。頸聯に「飢鳥は旧壘に啼き、疲馬は空城を恋う」とある。戰場が背景となつていることも杜甫の詩と共通する。
- (4) 飢えた禽獸を詠ずることは鮑照あたりから始まるのであろう。鮑照の作品には「饑猿」(『代苦熱行』)、「饑禽」(『冬日』)の語がある。また、杜甫「杜鵑行」(古時杜甫称望帝)、『詳注』巻九)には、「皮を穿ち朽を啄みて瘡は禿せんと欲し、飢えに苦しんで始めて一虫を食らうを得」と言っていて、飢えたホトトギスの、子を思う行動が写實的に詠じられている。この部分は劉宋・袁淑「啄木詩」(『宋詩』巻五)の「南山に鳥有り、自ら啄木と名づく、饑うれば則ち樹を啄み、暮るれば則ち巢宿す」から発想を得たものであろう。しかし「杜鵑行」自体は『詳注』や『説杜心解』などに指摘があるとおり、杜甫の作とするには疑念があるのでこれには触れなかった。
- (5) ただし『詳注』に引く鶴注は、杜甫に別に秦州で書かれた「秦州見敕目薛三璩授司議郎、畢四曜除監察与二子有故、遠喜遷官、兼述索居、凡三十韻」(『詳注』巻八)があることから乾元二年の作としている。
- (6) 引用は『漢書』による。
- (7) 引用は『全唐詩』による。
- (8) 『全唐詩』に「一に寒に作る。」とある。
- (9) 「発同谷県」の原注に、「乾元元年(七五八)十二月一日、隴右より成都に赴く紀行。」とある。
- (10) 『北史』巻四六、馮元興伝には、「家は素より貧約にして、食客は恒に数十人、其の飢飽を同じし、時人歎じて之を尚ぶ。」とあるように、史書には用いられる。
- (11) 「為農」(『詳注』巻九)があつて、「宅を卜して茲れより老いん、農と為つて国を去ること餘かなり」と述べているほか、「有客」(同)には「自ら鋤けば菜甲稀なり、小しく摘むは情親の為なり」とある。なお杜甫と農業の関わりについては古川末喜氏に「杜甫農業詩研究」(知泉書館、二〇〇八)という労作があり、第Ⅱ部成

- 都期第二章に、「農に言及する詩はあつても具体的な農事に説き及ばないというのが、成都時代の杜甫詩の特徴なのである。」という指摘がある。
- (12) 第六句の「蒼」について『詳注』は「一に飢に作る。」と言う。
- (13) 例えは邵宝集註「刻杜少陵先生詩分類集註」巻一四の題下注には、「此の詩は、郭英父の為にして作る有り、嚴武の為にして作ると謂う有り、皆な定む可からず。」と言ひ、単復「説杜詩愚得」巻一は「莫相疑行」に続いて「赤霄行」を載せ、後者の注に、「此れと前篇とは、必ず為にして作る有り、今其の指す所を知らず。」と言う。
- (14) 『集千家註分類杜工部詩』巻二四に、「八詩は一時の作に非ず。……蓋し宝応・広徳より大曆の初めに至るまで、此の作有り。」と言う。
- (15) 『詳注』は『詩経』周南・汝墳の句、「未だ君子を見ざれば、怒として調(朝)飢の如し」に付された『韓詩章句』の「薛君の章句に云う、朝饑最も忍び難し」という指摘を引く。ただし、この句は夫の帰りを渴望する妻の心情を述べると見なすべきであろう。
- (16) 『列子』説符篇にも、「柱厲叔は莒の敖公に事う。自ら己を知らざる者と為して、海上に居る。夏日は則ち菱菱を食らい、冬日は則ち橡栗を食らう。」という類似した文が見える。
- (17) 『杜臆』巻一〇は「粟馬」の句について、「孟子の諸侯に伝食する者の如し。」と言う。この一文は『孟子』滕文公章句に見えている。また「歴聘」の語は、李白「贈崔郎中宗之」(『李太白文集』巻八)に、「仲尼七十にして説くも、歴聘収めらるる莫し」とあるように、孔子について言うことが多い。なお、何焯『義門読書記』巻五二は、「薇蕨」の二句について、「寧ろ伯夷の隘を為すも、敢えて南宮の粟馬に藉口せず、蓋し直性を傷るを恐る。斯文軽しと雖も、仮借すること早歳鮮于太常の徒に於いてするが如き有り、亦病とするに足るなり。」と言う。諸説があつて定めがたいが、「旧注」によって解しておく。
- (18) 「索飯」という語も杜甫以前には見られないようである。

(札幌校教授)